

演劇「ロビンフッド」を生きる寮生たち

寮生劇とは…

もみじ・あざみでは、毎年3月に一年の暮らしを振り返って、私たちが寮生劇と呼んでいる、学芸会ではない本物の劇の発表会をしています。寮生劇は、寮生さん(※)一人ひとりにスポットが当たる場であり、それぞれが自由になれる、自分の思いを出せる場です。そして、会場にいる観客の温かい拍手によって、自分の存在を認めてくれてくれる人がいることが認識できる場です。寮生劇は生きる力を育てました。その後、街の劇場でプロの俳優との共演、5年に一度の「ロビンフッド劇」の上演に発展していきました。鉄腕アトム作曲を作った音響デザイナーで、毎年寮生劇の音楽を作っていた大野松雄さんとのご縁で、秋浜悟史さん(岸田戯曲賞受賞)に「ロビンフッド」の脚本・演出をしていただくことになりました。名伯楽との出会いは幸運でした。私たち支援者にとって、寮生劇・ロビンフッド劇の中では、指導ではなく同じ目線で遊ぶことが求められますが、それは難しく、遊べないのです。遊びの根底にある即興、それにも体が反射しないで固まってしまい、遊びにも普段の関わり方や仕事ぶりが露出します。劇づくりはきつい。それでも寮生さんとの関わりで、困った時や腹が立った時に、ちよっと待てる、間がとれる、程良い折り合いがつけられる。そんな精神の柔軟さ、感性と想像力を鍛えられます。

※利用者を私たちは親しみを込めてそう呼んでいます。

井上正隆さん

もみじ寮 元施設長



地下水を汲み上げ続ける責任

寮生劇の素晴らしさを、滋賀全域の障がいのある人たちと共有したい。そんな夢が実現した6回目の「ロビンフッド劇」を糸賀音楽祭で上演しました。メーカーキャップする前は俯いて「先生」と呼んでいた近江学園の園生の一人が、メーカーキャップ室から出てくると、顔を上げ、目を輝かせ、嬉しくてしようがない様子で私たちの周りを飛び回り、「先生」を「おっちゃん」と呼びました。解放されたんです。

劇の指導をしていたら25年目に、秋浜さんに感謝状を贈りました。「あなたは四半世紀にわたる『ロビンフッド劇』の指導と交流を通して寮生に演じることと生きることの楽しさを教えてくださいました。みんなが主役を合言葉に寮生さんは今日も輝いています(文面の一部)」。障がいのある人たちが自らを解放する場があり、みんなが主役で、一人ひとりの違いを認め合える暮らし。そんな当たり前の社会であってほしい。

今も底流で静かに息づいている近江学園から脈々と流れる糸賀思想。「発達保障」「この子らを世の光に」が、より確実に認知されていくためにも、私たちが試みてきた寮生劇やロビンフッド劇、そして糸賀音楽祭の存在は貴重です。井戸を掘り地下水を汲み上げ続ける責任があります。

障害者支援施設もみじ・あざみでは、1979年から5年に1回「ロビンフッドの日」が上演されており、本音楽祭では、2006年(第五回)に上演されました。長年、その演劇活動を見つめてこられた井上さんに、30年以上続く演劇の取り組みについてメッセージをいただきました。